

文人の世紀

著者	高橋 博巳
号	23
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文 第272 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59292

たか はし ひろ み
高 橋 博 巳

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 272 号
学位授与年月日 平成23年 6 月16日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学位論文題目 文人の世紀

論文審査委員 (主査)

教授 佐藤 弘 夫 教授 佐藤 伸 宏
教授 佐倉 由 泰

論文内容の要旨

小論は晩近二十年間の文人研究を集成したもので、並行して執筆した小著『京都藝苑のネットワーク』(一九八八年)、『江戸のバロック』(一九九一年)、『画家の旅、詩人の夢』(二〇〇五年、以上、ペリカン社)に未収録の原稿を中心に、別途執筆した朝鮮通信使に係わる“Koran Envoys and Japanese Confucians”(国際一八世紀学会ロサンゼルス大会ラウンドテーブル、二〇〇三年、『金城学院大学論集(人文科学編)』国文学編四六、二〇〇三年、以下『論集』と略記)以下、

- ☆「李彦瑱の横顔」(韓国一八世紀学会二〇〇五年シンポジウム、『論集(人文科学編)』二-二、二〇〇六年)
- ☆「文人たちの宴『以德醉人、勝於以酒』——一七六三～四年の通信使行」(『前近代における東アジア三国の文化交流と表象——朝鮮通信使と燕行使を中心に——』国際日本文化研究センター第二九回国際研究集会予稿集、二〇〇六年、報告書は近刊)
- ☆「東アジア“文芸共和国”の可能性」(韓南大学校日本学科講演、二〇〇七年、『金城日本語日本文化』八三、二〇〇七年)
- ☆「通信使・北学派・兼葭堂」(朝鮮通信使国際学術シンポジウム、釜山広域市庁舎、二〇〇七年、『朝鮮通信使研究』四、釜山大学校、二〇〇七年)
- ☆“A Republic of Letters in East Asia”(国際一八世紀学会モンペリエ大会ラウンドテーブル、二〇〇七年、『論集』四-一、二〇〇七年)
- ☆「成大中の肖像——正使書記から中隠へ——」(日韓美学研究会、神戸女学院大学、二〇〇八年、『論集』五-一、二〇〇八年)
- ☆『東アジアの文芸共和国 通信使・北学派・兼葭堂』(新典社新書二六、二〇〇九年)

☆「元重挙——特立独行の人——」（『論集』六―二、二〇一〇年）などの拙稿群とも互いに関連して、共々相補う位置にある。

まず目次をかねて初出一覧を掲げ、以下章ごとに要旨を略述したい。

I 文人社会の成立

- 一 文人社会の形成（『岩波講座日本文学史』9、岩波書店、一九九六年）
- 二 文人と絵画（『時代別日本文学史事典近世編』東京堂出版、一九九七年）
- 三 漁者樵者の系譜——蕪村から竹田まで——（『和漢比較文学』二二、一九九九年）

II 田能村竹田の詩と絵画

- 一 文人竹田への接近（「田能村竹田——近世後期文人社会における脱国家——」、『国家と宗教』思文閣出版、一九九二年所収を改題）
- 二 詩人の恋——竹田の青春——（『日本一八世紀学会年報』一〇、一九九五年）
- 三 「長誤詞客、前身可画師」——竹田筆《寒林帰樵画卷》をめぐって——（『出光美術館館報』八四、一九九三年）
- 四 竹田の隠退（『文芸研究』一三一、一九九二年）
- 五 「蘭外無心、心外無蘭」——文人竹田の離陸——（『文芸研究』一三六、一九九四年）
- 六 竹田の中国趣味（『日本学』一九、名著刊行会、一九九二年）
- 七 長崎の竹田（『江戸文学』一七、ぺりかん社、一九九七年）
- 八 隠栖喫茶図（『国華』一二九一、朝日新聞社、二〇〇三年）
- 九 蝶園の庭——竹林とヒアシンス——（『論集』人文科学編、三―一、二〇〇六年）
- 十 瀬戸内を行く竹田（『出光美術館館報』一三〇・一三一、二〇〇五年）
- 十一 止揚された中国趣味（『論集』国文学編四四、二〇〇二年）
- 十二 心で画が描けるか？（『国文学解釈と鑑賞』一〇、至文堂、二〇〇八年）
- 十三 題画詩の世界（同上、一二、二〇〇八年）
- 十四 竹田画論の周辺（『日本絵画論大成』9「解説」、ぺりかん社、一九九六年）

III 文人の世紀

- 一 詩人南山一失われた環一（『文学』八―三、岩波書店、二〇〇七年）
- 二 江漢の和蘭茶臼と山陽の蘭^{コーヒーミル}^{ワイングラス}（『論集』人文科学編、六―一、二〇〇九年）
- 三 耶馬溪変奏曲（「『耶馬溪変奏曲』に寄せて」、『日本一八世紀学会年報』二四、二〇〇九年所収、を改題）
- 四 東アジアの半月弧——浪華・ソウル・北京——（『啓蒙と東アジア』一八世紀科研研究会、近刊）

以上、四〇〇字詰め原稿用紙に換算して、約一三〇〇枚。

I 文人社会の成立

序論に代えて巻頭に置いた第一章「文人社会の形成」は、『岩波講座日本文学史』（岩波書店、一九九六年）に執筆したものに、わずかな修正を施して収録した。江戸中期、荻生徂徠や木下順庵門下の活動は古文辞学のメソッドを北は松前藩から西は九州全域にまで普及させ、日本人の漢文能力を飛躍的に向上させて、その結果、各地に文人が生まれた。一例を野村東皐にとれば、周囲の反対を押し切って同志

十二人と経史諸子百家の書を講究する「会業」を始め、古代の「博習楽群」の習慣を当代に蘇らすべく「楽群亭」を建設して、学徳を磨き修める場とした。そして「華夷」の基準は国に「道」があるかどうか、すなわち「礼楽文物」によって決まるとした。この「夷」を変じて「夏」（華）とする志が、文人社会に品位をもたらし、ひいては社会の文明化にも貢献したはずである。こうして各地に散在していた文人たちは、やがて藩を超えて全国規模の「文人社会」と呼び得るような緩やかな集団を形成し、中国モデルを理想としつつ、日本風を加味した文雅の花を咲かせるに至った。その初発の種々相を必ずしもメジャーではない文人も含めて幅広く俯瞰し、この時期の文人社会の広がりや層の厚さを明らかにした。

第二章「文人と絵画」は『文学史辞典近世篇』（東京堂出版、一九九七年）の項目として執筆したために、文人画のA to Zを文学史の流れのなかで概観した。その際、とくに文人画の大成者、大雅と蕪村の相違点を明らかにし、両者を総合した竹田への流れが自ずと浮かび上がるように叙述を工夫した。文人画の隆盛には社会の成熟と安定を必要とし、その要件を満たすことができなかった幕末以降は衰退を余儀なくされた。

第三章「漁者樵者の系譜——蕪村から竹田まで——」は、文人活動の軌跡を蕪村から竹田まで、両者の作品に共に登場する「漁者樵者」を手がかりに分析した。蕪村とその仲間たち、いわゆる〈蕪村シュール〉は同時代に普遍的だった文人たちには十分に理解されず、その周縁で細々と活動せざるを得なかったが、村瀬栲亭や菅茶山ら少数の理解者を経て、その技術と精神の最良の部分が竹田に伝わり、やがて蕪村から竹田への系譜が文人画の主要ルートとなった経緯を、作品相互の比較のもとに明らかにした。たとえば蕪村の《闇夜漁舟図》と竹田の《漁舟売章魚図》の二点は舟上で共に働く親子を共通点にしながら、「夜」の場面を「朝」に変えて、見事な対照をなしているのは偶然だろうか？

Ⅱ 田能村竹田の詩と絵画

第一章「文人竹田への接近」は、源了圓教授の古稀記念論文集『国家と宗教』に寄稿した「田能村竹田——近世後期文人社会における脱国家——」を大幅に改稿したもので、これをきっかけにして竹田研究に取り組むこととなった。一応、竹田の全生涯に触れ、文人画家として〈竹田様式〉が完成するところまでをカバーしているが、細部の論証は以下の各篇に譲る。

第二章「詩人の恋——竹田の青春——」は日本一八世紀学会の竹田市役所を会場に行われた第一六回大会で発表した「竹田の青春」の前半部分を『日本一八世紀学会年報』第一〇号（一九九五年）に発表したものを、改稿のうえ収録した。「悲恋」という個人の体験が大窪詩仏のもとに関連する詩画を送ることによって、また竹田自らも唐代伝奇の『霍小玉伝』を『風竹簾前読』と題して悲劇のヒロインに短評を付して私費で復刻することを通じて、文学史とも係わってくる様相を究明した。この作業を通じてなお十分に明らかなでない竹田の個人史に、周辺資料から照明を当てて解明する方向を示し得たと考えている。

第三章「『長誤詞客、前身可画師』——竹田筆《寒林帰樵画卷》をめぐる——」は、出光美術館所蔵の竹田の若描き《寒林帰樵画卷》について、画・賛の双方から作品の特色を分析した。本図は篆刻をよくした玉泉という若い僧侶の依頼によってまず画ができ、その三年後に度重なる催促を受けて賛が書き足されたもので、玉泉は当時、竹田の数少ない理解者の一人だった。それは儒者竹田に贈った印文に王維の詩句に基づいて、「長く誤りて詞客たるも、前身は画師たる可し」と彫られていたことによって明らかである。本質を認められた竹田は期待に応えようとしたが、その間の周囲の状況の変化によって着賛に手間取るあいだに、竹田の文学観にも古文辞から唐宋、そして清詩風への緩やかな重心の移動があったことが窺われる。そのズレが画と賛のあいだにはっきりと現れていることを確認し、生成期の竹

田芸術の一面を浮き彫りにした。

第四章「竹田の隠退」は、二十代後半から三十代にかけて竹田を襲った葛藤を扱う。竹田に隠退願望が萌したのは早く二十代後半に遡る。しかし実際に隠退が実現したのは三十七歳のときで、その前後、岡藩の内外で百姓一揆が発生し、非社会的な竹田もこのときばかりは社会に正面から向かい合った詩を何編かのこしている。文人の仕事は「虚」に属していても、そこに「実」の裏打ちがなければ、真の文人の所業とは言えないからである。しかし結局は現実の前になすすべもなく、竹田は小さな書齋に撤退するのだが、それ以前と決定的に異なるのは、そこには現実と拮抗しうる〈詩世界〉が構築されていたことである。文人活動が軌道に乗るにはまだ時日を要したが、三十代は離陸に向けての助走期間だった。

第五章「『蘭外無心、心外無蘭』——文人竹田の離陸——」は、三十八歳の竹田が《墨蘭図》を描いて、「蘭外に心無く、心外に蘭無し。若し筆墨を説けば、則ち第二義に墮つ」と力強く宣言したとき、真の自己確立を果たしたことを明らかにした。古文辞派でいるかぎり「心」を正面から取り扱うことは難しい。竹田は京都遊学のさいに師事した村瀬栲亭から「心」の重要性を学んで、それが自己を確立するきっかけとなった。これ以後、竹田の作画態度は揺らぐことなく、画は「心を以て観る可く、目を以て観る可からず」ということになった。「目」で見ているは「形」しか見えず、「心」で見てこそ「精」すなわち精神に到達できる。こうして「筆墨」の巧拙は第一義的には問題にならないという画期的な画論が唱えられるに至ったのである。

第六章「竹田の中国趣味」は崇拜の対象ですらあった中華文明の精華をどのようにして体得したかを、熊本藩学との関係のもとに捉えようとする試みである。竹田は文人としての生き方を熊本藩医の村井琴山・古香父子から、高潔な精神性を同藩儒の高本紫溟から学んだ。それは前者については、勤務に精励するかたわら休日には「別業船」を仕立てて舟遊を楽しむというような人生を楽しむ術であり、後者からは師の秋山玉山に飢饉の最中に誘われた野遊びを、「くず根ほる岡の翁のくるしみをしらでや人の遊びゆくらん」と諷して、思い止まらせるような姿勢のなかに一貫して流れていた人間性であった。短期間の接触とはいえ、竹田はこの両者からこもごも深い影響を受けて人格形成を果たしたのである。

第七章「長崎の竹田」は、中国趣味の本場長崎における様々な体験が〈竹田様式〉の成立にいかんにか資したかを探る。わけでも長崎に特有の「崎人」のライフスタイルが竹田の意識と生き方にもたらした影響と、長崎ならではの「真実の唐」体験の持った意味を考察した。長崎での体験を集約した『自画題語』前編における「小技」「微物」の強調は、長崎という「小」世界の豊かさの発見という美しい逆接の反映である。

第八章「隠栖喫茶図」は、美術誌『国華』寄稿解説をそのまま収録した。同図の関連資料は少なく、かろうじて賛を手がかりに解説の筆を執ったものの、調査には限界があった。そこで解説執筆時には気がつかなかった事実に基づき書き改めたのが、次篇の第九章「蝶園の庭——竹林とヒアシンス——」である。

竹田の同図を見ただけでは、モデルの蝶園は煎茶趣味の典型的な文人としか思われぬ。しかし蝶園は一方で、海外情報に敏感な、ヨーロッパ渡りの珍しい植物をその庭に植えてガーデニングを楽しむような別の一面を持っていた。その方面の影響を受けたのが松浦武四郎で、本篇ではやがて「北海道」の名付け親として名をはせる武四郎と竹田の意外な接点を取り上げ、文人社会の広がりを確認した。

第十章「瀬戸内に行く竹田」は、生涯を通じて何度も往復した瀬戸内海での船上ならびに寄港地での制作を中心に、竹田芸術成熟の過程を跡付けた。竹田は《三津浜図》において画面中央に文人の住居と魚市場の競りの場面を並置しているが、これは文人活動と商行為のあいだに何の区別もなかったことを示している。同様に同じ頃描かれた《船窓小戯帖》の中の〈売章魚図〉とそれを独立させた《漁舟売章

魚図》には、はっきりとそれとわかる形で「銭差し」が描かれている。文人画に貨幣ほど場違いなものはない。それを敢えて試みたのは、文人画家もそれなしでは生きて行けないという事実を肯定的に受けとめた証左である。重要なのは、竹田においてはこの認識がいささかも文人画が心の芸術であることを妨げるものではなかった点である。

第十一章「止揚された中国趣味」は、〈竹田様式〉の完成に必要な中華趣味からの脱却ないし飛躍を取り扱う。竹田は「名家の病は、多く拙ならざる処に在り」といって「拙」を積極的に標榜し、これこそが「最も得意の処」として、そこに独自性〈竹田オリジナル〉を打ち立てようとした。それは漢・和両要素の絶妙なバランスのうえに立って成立する。四十四歳のときの書簡に竹田は「近日、甚世話敷、且又前日は唐人、今日は日本人、其上へ歌人・茶人と相成申候。むかしの竹田生にはあらざる也」と記しているが、「むかしの竹田生」からは想像もできない伸びやかな感性の持ち主となって和・漢を跨いで、「歌人」「茶人」と地域と領域を自在に越え、それらを総合した〈文人〉としての生き方を確立している。こうして「小生輩伯仲ノ人斗集め^{ばかり}」た清詩のアンソロジー『今才調集』を編集出版する一方で、旅先には「袖珍和歌三代集」を携えるというように和・漢双方を両立させながら、様式の完成に近づいていったのである。

第十二章「心で画が描けるか？」と第十三章「題画詩の世界」の二篇は、たまたま相次いで同じ雑誌に寄稿したものであるが、主として竹田晩年の作品を対象としている。竹田は終始「自娛」の精神に立脚して、「筆の工み」よりも「精神の到らざるを患う」という立場を維持し、ついに《稻川舟遊図》において「用筆・布景、吾より古を作す」という段階に到達した。この状態を自ら説明して、《亦復一楽帖》の賛では「点染位置の前人の未だ写し到らざる所に写し到る」と述べているが、この前人未踏の地点への到達には限りない古典学習があったことを見落としてはならない。そのうえで竹田は学んだ古典を超えたのである。その最大の理解者が近くで画業を見守っていた頼山陽だった。ところで竹田は画論を考えるさい、書論を援用して古典から学ぶことの重要性を強調している。そうして趙孟頫以下の詩と絵画をもとに、人までをまるごと把握して全人的な理解に努めたことが知られる。

「題画詩の世界」では、四十六歳のときの『黄筌紀行』、五十歳の長崎での一年間の滞在中の一齣を、それぞれ生成過程の里程標として論究した。

第十四章「竹田画論の周辺」は、畢生の代表作『山中人饒舌』をはじめ、『自画題語』前・後編、『師友画録』などの主要な画論の解説として執筆したので、総論の代わりに収録した。

Ⅲ 文人の世紀

題名に掲げた「文人の世紀」とは、文人がもっとも輝いていた近世後期、十八世紀から十九世紀の前半を指しているが、この世紀がいかに我々の関心から遠ざかっているかということを、第一章「詩人南山一失われた環一」を執筆して改めて思い知らされた。本篇は文学史から忘れ去られて久しい仏者詩人の珠玉の作品を取り上げて、再び文学史に正当に位置付けることを目指している。生前の華々しい活躍が没後も伝えられ、長く人々の記憶に留まる事例もあるなかで、南山の場合はその措辞のあまりの難しさがわざわざして早々に忘れられたようだ。しかし気長に付き合えば、豊潤にして他の追隨を容易に許さない秀作が目白押しであることに気付く。江戸の文学史には、すでに独庵・元政・万庵・大潮・大典・六如ら錚々たる仏者詩人の系譜があり、南山はそこから外れた「失われた環」であったが、その復活は「文人の世紀」に一層の輝きと充実をもたらすにちがいない。

第二章「江漢の和蘭茶臼^{コーヒーミル}と山陽の蘭卮^{ワイングラス}」は二〇〇八年十月十六・十七日の両日、パリのInstitute National d'Histoire de l'Art (INHA) で開かれたグルベンキアン財団 (Centre Culturel Calouste

Gulbenkian)・高等研究院 (Ecole Pratique des Hautes Etudes)・フランス国立極東学院 (Ecole Française d'Extrême-Orient) 共催の「一六世紀～一九世紀間の日欧文化比較」のコロクに招かれ講演したさいの原稿「江戸の儒者が見た『西洋』と『古代の理想』」に、その一週間後の十月二十三・二十四日の両日、ライデンの Museum Volkenkunde を会場にして開かれた国際研究集会「知的ネットワークとしてのオランダ東西インド会社」で発表した原稿“At the break of the modern age: The VOC and Japanese Intellectuals”を合成・取捨して一文としたものである。フランス語版も今年、“《L'Occident》 et 《l'idéal antique》 chez les confucianistes de l'époque d'Edo” (*Empires éloignés L'Europe et le Japon (XVIe-XIXe siècle)*, Ecole française d'Extrême-Orient, Paris, 二〇一〇) として刊行された。

小論ではとくに従来の儒学研究からは気付きにくい開明派儒者の観点から彼らの活動に焦点を合わせ、「文人」という既成観念の幅を広げることを目指した。こうして白石以下、宮瀬竜門、滝鶴台、三浦梅園、帆足万里、司馬江漢、頼山陽たちの西洋認識のありようを検討したなかで、わけても注目されるのは、江漢が西洋では知識を独占せず、広く公開して役立てる行き方へ共感を示し、一方日本にあっては「財禄と位階」しか重要視されない点が指摘されていることである。そして大国評価の基準が「人情親切」や「礼讓」「風韻」といった目に見えないけれども極めて重要な点に求められていたことが特筆される。こうした開かれた精神と態度とは趣を異にしながら、山陽のワイングラスで灘の清酒を味わう姿勢にも通い合っ、文人社会の洗練はこうした趣味生活にまで及んでいたことがわかる。

第三章「耶馬溪変奏曲」は、広島県立歴史博物館所蔵の杜仁里筆《耶馬溪図巻》への関心から、著名な頼山陽の同名作品の前後に制作された諸作品との関係を明らかにしようとして、結局、杜作品は「耶馬溪」ではなく「筑後川」を描いたものであることが判明した経緯を綴ったもので、いわば作品の連関をたどる過程で副産物として文人活動の種々相を垣間見ることができた。

第四章「東アジアの半月弧——浪華・ソウル・北京——」は、これまで日本の文人活動に限られていた視野を東アジアに広げて、朝鮮通信使研究を介して李氏朝鮮の北学派の思想家たちとの関係に始まり、朝鮮から北京に派遣された燕行使に随行して清朝の文人たちと交流し刺激を受けたソウルの文人たちの活動を取り上げて、その魅力的な諸活動がもつ意味を追究したものである。

話の発端は浪華における木村兼葭堂グループと通信使一行との交流だった。ことに中心的な役割を果たしたのは、正使書記の成大中と副使書記の元玄川である。この人々の人間性への信頼は、易々と国境を越える強さを持っていた。彼らを通じて兼葭堂たちの日本の文雅がソウルに伝えられ、その情報に関心を示した洪大容は同様の文人・知識人を求めて北京に赴き、厳誠・潘庭筠・陸飛らの三人組と意気投合して「天涯知己」となり、多くの筆談記録をソウルに持ち帰った。その影響は通信使のときの比ではなく、李徳懋・柳得恭・朴齐家ら若い思想家・文人たちはいよいよ清朝の学芸への興味を深めるに至った。そこでまず試みられたのは、彼らの選詩集を清朝の文人に送って評を求めることだった。はたして李雨村と潘庭筠によって序と評が加えられ、その次第は多く写本で伝わる『巾衍集』によって辿ることができる。

これらの詩人たちは後に燕行使の一員となって中国の土を踏み、学問や詩文書画の本格的な交流に乗り出した。その相手は紀昀や翁方綱はじめ、潘庭筠・李調元ら当時の学界を代表する面々だった。また文人画家の羅聘とも詩画の交換をするなど、鎖国日本では考えられない交流が繰り広げられた。北京の外交官施設の会同館においてはさらに越南の使節とも詩文の応酬があり、清朝の国際的な環境のなかでまさに「文芸共和国」が形成されていたのである。

翻ってソウルでは、こうした開明的な思想家が正祖によって要職に抜擢され、理想的な政治が行われ

ようとした矢先に、正祖の死によってその理想はあえなく潰え去った。しかしその生き方は、「凡そ友を取るの道は、先に其の品を看て、後に其の材を看る」という李徳懋の立言に鮮やかに示されているように、なによりも「品」が重視されていたことが特筆される。友人選択の基準が「能力」ではなく、「人品」や「人柄」が優先されたところに北学派の思想家の素晴らしさの秘密がある。洪大容が日本の文人に関心をもったきっかけも、「才」や「学」もさることながら、なにより日本の文人の「種種風致」に感心したからだった。その洗練は朝鮮はもちろん、中国においてさえも容易に見出しがたいとまで大容は述べている。これはすべて人間的な魅力に係わることで、学んで身につくこともあるだろうが、それだけでは覆い尽くせない、曰く言い難い要素だった。

本篇ではこうした朝鮮の北学派に影響を与えただろう清朝の文人たちにも若干の頁を割いて、その魅力の一端を解明した。潘庭筠とも交際のあった羅聘はもちろん、陸飛に篆刻を贈った丁敬や黄易、また羅聘の師にあたる金農らの行実はい時代人として朝鮮の文人にはかけがえのないお手本となっただろう。一八世紀の文芸共和国はこうして浪華の地に端を発し、北京を経て、ソウルの地で形成されたと言えることができる。小論を題して「文人の世紀」という所以である。

論文審査結果の要旨

本論文は、江戸時代の半ば以降の時代、とりわけ18世紀後半からのおよそ100年間を〈文人の世紀〉と規定し、田能村竹田を中心に、宗派や学派を越えた多数の〈文人〉たちの交流の実態と、彼らが作り上げた豊かで多彩な文芸・思想・文化の解明を試みたものである。

第Ⅰ部「文人社会の成立」は3章からなり、江戸中期に荻生徂徠と木下順庵門下の活動が古文辞学の方法を日本全国に普及させ、日本人の漢文能力を飛躍的に向上させて、各地に文人が生まれたこと、彼らがやがて藩を超えて全国規模の「文人社会」と呼びうるような緩やかな集団を形成し、中国モデルを理想としつつも、独自の風味を加えた文雅の花を咲かせるに至ったことが、その衰退までを視野に含めつつ、広いコンテクストのなかで論じられる。

第Ⅱ部「田能村竹田の詩と絵画」は14章からなり、江戸文人を代表する田能村竹田を取り上げ、その生涯を辿りながら、文人画家としての〈竹田様式〉が完成するまでの足跡を詳細に跡付ける。竹田の文学観における古文辞から清詩風への重心の移動、「心」の重視に代表される精神性への傾倒、その画にうかがわれる「銭差」など世俗的な事物への関心など、随所で研究史上重要な指摘がなされている。

第Ⅲ部「文人の世紀」は4章からなり、これまで文学史において必ずしも重視されてこなかった18世紀後半から19世紀前半の時代＝「文人の世紀」について、そこにおいていかに豊饒な思想的・文化的営為がなされたかを、朝鮮通信使などとの国境を越えた文人の交流にも光を当てながら明らかにしている。これまでほとんど研究の対象とされてこなかった、南山など仏者詩人の系譜の重要性と江戸文学史上におけるその正当な位置づけの必要性を論じるとともに、その文学の特質を解明した点も注目される。

本論文は、従来朱子学、古学、国学、仏教といった学派・宗派別に縦割りで把握されてきた江戸時代、とりわけその後期の思想と文化を、〈文人〉という視座を導入することによって、実態に即してより立体的・総体的に把握することに成功している。朝鮮・中国・ベトナムへと国境を越えて広がる文人同士の交流を、「文芸共和国」として把握しようとするその視座と方法も独創的であり、今後の研究の進展が期待される。本論文の成果は、斯学の発展に寄与するところまことに大なるものがある。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。